

21年目の葉山

村山市立葉山中学校
学校だより
第13号
令和6年10月29日

健やかな成長を支える学校給食

校長 富塚 義幸

「秋といえば…」と問われたら、私は「食欲の秋」と答えます。今回は、学校給食の歴史について紹介します。日本の学校給食のスタートは、なんと山形県です。明治22年（1889年）、山形県鶴岡町（現在の鶴岡市）の私立忠愛小学校で、貧困児童を対象に無料で学校給食を実施したのが我が国の学校給食の起源とされています。当時の献立は、おにぎり、塩鮭、漬物でした。それ以来、学校給食は各地に広まりましたが、戦争によって一時中断されました。戦後、食糧難による子どもの栄養状態の悪化から再開が求められ、昭和22年（1947年）に学校給食が復活し現在に至っています。

私は、小学校・中学校（高等学校・大学）在学中、給食を食べたことがありません。給食を食べたのは教員になってからです。ですから、大人になって同窓生と会うと「給食食べたことある？」と尋ね、「自分は毎日食べている！」と自慢します（9月に行われた中学校「還暦同窓会」でも話題になりました）。私の通っていた小・中学校は、『ミルク給食：給食内容がミルクのみである給食』で弁当持参の登校でした。葉山中学校は、『完全給食：給食内容がパン又は米飯（これに準ずる食品を含む）、ミルク及びおかずである給食』です。その他に『補食給食：完全給食以外の給食で、給食内容がミルク及びおかず等である給食』があります。学校給食法では給食の目標について、①健康の保持増進を図る、②望ましい食習慣を養う、③明るい社交性・協同の精神を養う、④生命・自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養う、⑤勤労を重んずる態度を養う、⑥食文化について理解を深める、⑦食料の生産・流通・消費について正しい理解に導く、この7つを挙げています。手作り弁当の良さもたくさんありますが、「同じ釜の飯を食う」給食での互いの心の結びつきは大きいと感じています。以下はベーグルやバンズパン、食パンが主食となる水曜日10月23日の給食です。



※村山市教育委員会「令和6年度10月分 村山市中学校給食献立表」より

献立名	主に体の組織をつくる		主に体の調子を整える		主にエネルギーになる		エネルギー たんぱく質
	1群	2群	3群	4群	5群	6群	
バンズパン	鶏肉	牛乳	パセリ	にんにく	バンズパン	油	782 kcal 35.7 g
タンドリーチキン	ちくわ	ヨーグルト	人参	もやし	じゃが芋		
野菜ソテー	ベーコン		ピーマン	キャベツ			
ポテトスープ 牛乳			ブロッコリー	玉ねぎ コーン			



村山市の中学校給食について補足します。主食はご飯で200g（精白米で90g）です。水曜日はパン給食です。文部科学省から出されている「児童又は生徒一人一回あたりの学校給食摂取基準」に基づき中学生の1日に必要な栄養量の3～5割を摂れる内容の献立作成を行っています。エネルギー：830kcal、たんぱく質：35gが基準です。いつも美味しくいただいています。

『ノラネコぐんだんラーメンやさん』 21

さて問題です。「上記は何を表しているでしょうか？」「上記から連想することは何ですか？」唐突な質問でピンとこなかったかもしれません。村山市立図書館全体で、4月から一番貸し出しのあった本です。第1位は『ノラネコぐんだんラーメンやさん』（工藤ノリコ 著：白泉社）の21回、第2位は『ノラネコぐんだん おぼけのやま』（工藤ノリコ 著：白泉社）と『たまごのえほん』（いしかわこうじ 著：童心社）の20回です。幼児から大人まで本を借りることができる村山市立図書館で児童の絵本がトップ3というのは興味深いですね。では、13歳から15歳の葉山中学校生徒の皆さんが図書室で4月から借りた本、多い順にトップ3は…

順位	資料名（本の題名）	著者名：出版社	回数	分類
1位	『成瀬は天下を取りに行く』	宮島未奈 著：新潮社	14回	(9)文学
2位	『もっとずるいきもの図鑑』	今泉忠明 監修：宝島社	13回	(4)自然科学
2位	『ホモサピのいきもの調査報告書』	ホモサピ 著：KADOKAWA	13回	(4)自然科学
2位	『満月珈琲店のレシピ帖』	桜田千尋 著：主婦の友社	13回	(5)技術

トップ4の発表になりましたが、読んだことのある本はいくつありましたか。私は、10月初旬に『成瀬は天下を取りに行く』を読みました。「成瀬が主役であることは間違いないのだけれど、後半の島崎の成長が頼もしくて、ゼゼカラが解散しなくて安心しました」私の感想です。私は「本が好き」です。もっと大きく括って言うなら「活字が好き」です。毎朝、新聞を読むのが楽しみです。私が「本を読む理由」を考えてみました。三つのことが思い浮かびました。

心が動かされるから

今まで読んだ本の中で特に印象に残っているのは、『横道世之介』（吉田修一 著：文春文庫）、『続 横道世之介』（吉田修一 著：中央公論新社）、『永遠と横道世之介（上）（下）』（吉田修一 著：毎日新聞出版）です。世之介の“この世で一番カッコいいのはリラックスしている人です”という言葉に心が動かされ、「そういう人間になりたいな」と思いながら毎日を過ごしています。

考えが深まるから

9月、夢中になって読んだのは、『仙台育英 日本一からの招待』（須江航 著：KANZEN）です。2022年の全国高等学校野球選手権大会で日本一になった仙台育英学園高等学校硬式野球部監督、優勝インタビューで「青春は密」と言った須江航さんの本です。須江さんの“「わかる→できる」ここで終わっていないか？「わかる→できる→いつでもできる」まで徹底する”という考え方は、学習や部活動にいかせると思いました。

疑問が解決するから



毎朝、校長室の前で人を恐れずクルミ割りをするカラス。私は“ガー子”と呼んでいます。「カー」ではなく「ガー」と首を振って鳴いているような気がするのです。『カラス学のすすめ』（杉田昭英 著：緑書房）で、ガー子の正体がわかりました。クルミ割りをして濁音が入った声で鳴くのはハシボソガラス。短い音は警戒を意味するので真似してみます。